

## 〔書評と紹介〕

佐々木馨著

### 『北方伝説の誕生』

菅田 慶信

本書は、「みちのく」と北海道という北方世界で、伝説の生まれてくる背景、伝説の継承、地域形成にはたした伝説の文化力を「構造的伝説論」の基本構図により論じたものである。「伝説の基本構図Ⅰ」は、正史・民話（民衆）・宗教勢力・在地権力の四点からなる四角形で構成され、土着性と真実性を特質とし体制的な正史の世界と対峙する「民話的伝説」、地域的な自己主張と真実性という点で正史と「民話的伝説」の中間に位置する「歴史的伝説」に分かれて図示される。また二つの伝説の受容・伝承の直接的担い手として、宗教勢力と在地権力による「地域開教・啓発」「地域開発・創生」という殖民的機能の要素を設定し、四点にはたらくベクトルを示す。また、伝説が未来に向かって地域に文化的な意味を作用し続ける「伝説の文化力」の軸線を図示する。その独創的図式は注目される。

この基本構図を記した「Ⅰ伝説の歴史と地平」をうけ、「Ⅱ歴史的伝説の世界」、「Ⅲ民話的伝説の世界」、「Ⅳ北方伝説の風土」の具体的叙述に入る。Ⅱでは、「みちのく」を主要な考察の場とし、坂上田村麻呂、北条時頼、日持の三人の歴史的事実者にまつわる「歴史的伝説」を論じる。田村麻呂は、「歴史的伝説」のヒーローとして「伝説の基本構図

Ⅰ」が示す文化力の最大値を有するとともに、八世紀から十三世紀の「みちのく」の「擦文時代」においても、心温まる人間、涙で迎えた征夷大將軍として民衆の心のなかに語り継がれ、「民話的伝説」の主人公としても最大の文化力を有する人物であった。田村麻呂伝説は、円仁の天台宗伝道伝説に相通じて「みちのく」を天台宗に染めていく、とする（ただし、田村麻呂により大同二年、寺社が創建されたという伝承が津軽を覆い尽くすのは、シャクシャインの乱の後である。「古層」になるとは、私には思えない）。著者は、林子平の『三国通覧図説』に拠り、「日本」の北限の境界線までの地「みちのく」とその以北に広がる「蝦夷」と区別し、蝦夷征討兵站地としての「みちのく」で「日本」「日本人」化が進むことを強調する。そして奥州藤原氏が、着夷意識からの自己脱却である脱夷を試みながらも、自己矛盾としての「日本人」というアイデンティティを持ちつつ「東夷の酋長」と自称していったとする。

鎌倉幕府の東国経営は、「みちのく」から蝦夷なるものを完全に排して「夷嶋」に追いやり、「みちのく」世界を完全に「日本」化した。「みちのく」住民の内面的世界をも「日本」化したのが、改宗を目的とする北条頼時の「宗教の旅」である。奥羽天台宗寺院の禅宗への改宗は、その現れであり、禅密主義の北進化としての北条時頼の旅伝説とは表裏一体である。「みちのく」の「日本人」創出は、中世アイヌ民族に新たな「夷」意識を刻印づけた、とする説は興味深い。唐糸悲哀物語（民話的伝説）が広範囲にひろがり、その文化力においても時頼は地域開発・創生に関わる英雄である、と述べる。

十六世紀前期、日尋の蝦夷地開教は、義経の嶋渡り敗走伝承と結びつ

いた海外伝道者日持への投影であった。近世中期においても、海外布教におもむく日持像が描出され、日達は中国山東省で日持の姿を発見する。近世後期、日持伝承を新事実として地域で創作していた函館実行寺の鶏冠石。「勇猛なる宗門の義経」としての日持創出に宗門も関与していた。

日持伝説は、日本近代国家の大陸政策と密接不可分に結びつき、二十世紀初頭、宗門のみならず知識人をして樺太日持遺跡の調査へと駆り立て、ついにはシベリアに精神的な世界統一の大義を有し、世界統一へと向かう日持像が作られていく。函館の信徒は、戦時日本を「昭和の国難」ととらえ、日蓮主義の熱狂の渦中にあつた。チングスハンに結実する義経の北方雄飛と日持海外伝道とは、見事に一致する。日持の文化力は強大化し、その伝説的位相は日本帝国主義の海外侵略に利用され（私は、利用ではなく、日本仏教そのものが日本軍国主義の核心的役割をはたしていたと考えているが）、東アジアというグローバルな世界に伝説化されていった、と結論づける。Ⅱの日持に関する記述は、本書の白眉的部分であり、『北海道仏教史研究』を上梓した著者故になしえたものである。

Ⅲでは、安東盛季の渡道から三守護職体制の成立史、コシヤマインの戦いを概観しつつ、中世和人の「みちのく」化は、和人による「日本」「日本人」化、新たな「夷」意識が中世アイヌ人への刻印となった、と記す。また四つの「民話的伝説」を述べる。一つは、アイヌ民族と和人との共生のなかで語り継がれた悲恋物語、二つ目は、荒木大学の砂金をめざす物語、次は茂辺地村に至った如意輪観音自在菩薩像物語（私は、むしろ典型的な「歴史的伝説」と考えるが）、四つには、落武者による乙部八幡神社勧請伝説である。これらの「民話的伝説」を前

述図式により分類し、悲恋物語が「地域開発・創生」を示し、残りの三つが「地域開教・啓発」と「地域開発・創生」を有する「民話的伝説」全体を覆い尽くし、その文化力は最大値である、とする。「民話的伝説」を歴史と地域への文化力においてとらえ直す所論は、斬新である。

ただ、民衆的言説の特質、世俗的価値を相対化する民衆の叡智などの発見が、「民話的伝説」の有する「真実性」を解明する上で不可欠なのはなかるうか。アイヌ民族の民話的伝説のさらなる詳細な分析も必須と思うが。

Ⅳでは、北方世界の伝説の底流に「開発」と「布教」（開教）とがセットとなつていくことから、その伝説風土の理由と背景について史的考察を加える。江戸幕府直轄寺院「蝦夷三官寺」とそれに対する松前城下寺院の抵抗、幕末期城下寺院の開拓精神が近代北海道の上からの開拓政策の先鞭となつたこと、蝦夷三官寺では、特にアイヌ改宗が重要課題となつたことを国泰寺や有珠の善光寺の教化活動から明らかにする。近代北海道開拓は、寺院開教と地域開拓と文明開化の三位一体の構図の下でなされ、寺院は積極的先鋭的開拓論を展開した、とする。浄土真宗本願寺派僧侶のお墨付きをえた「北海道宗教植民論」の分析から、仏教精神により精神を完全武装した宗教植民による北海道開拓の進展を強調する。仏教徒がアイヌ民族におこなつた宗教植民の暴虐性を痛感させる記述である。著者は、「みちのく」と「北海道地域」の二つの伝説の受容構図を提示し、「両地域で否定的な受容形態が遡源的に再生され、伝説を「史実」化し肯定的に保持する伝説風土が見られること、また「開拓と開教」の伝説風土の共有が見られたことを指摘する。「歴史の古層」であ

る古代部分を経験できない北海道地区に対して、「みちのく」擦文人は、「着夷」から「転夷」という民族的転換を図ることで和人となり、北方世界の正当化を図る「選民的变化」をとげたこと。近世から近代においても、「みちのく」擦文人の系譜をひく北東北の人びとは「歴史の古層」を自覚し、「歴史的伝説」として史実化することで、北海道との差異を顕示していった、と断言する。交流分断としての津軽海峡から「北の内海世界」への視座の転換をなしてきた近年の諸学説に、北海道の側から再考を迫る所論である。

では、北海道アイヌ民族は、仏教精神に武装化して行われた開拓・開教・開化のもとで、どのような伝説を肯定・保持したのであろうか。私には、アイヌ民族なき北方伝説の風土論のように思えてならない。また、青森ねぶたの武者絵に坂上田村麻呂が登場するのは日清戦争直前のこと。それは、無知蒙昧な風習を禁止する明治政府に対して、祭りを守るべく津軽住民が「中央」の田村麻呂を担ぎ出したことに始まる。北東北の民衆が対峙したのは、北方の北海道ではなく、南の明治天皇制国家であった。民衆が「歴史・民話の伝説」を創造していったのは、彼らが「歴史の古層」を自覚して北方地域の中の選民性を図ったからではなく、幕府や近代天皇制国家との対峙関係のなかで、支配者側の言説と歴史人物を逆手にとろうとしたからではないのか。戦国時代の北東北地方を劇的に変えた社会集団の移動の歴史が、「歴史の古層」によって「着夷」から「転夷」という民族的転換を引き継いだとは、私には思えない。民族的転換は民衆レベルまで同様におこなわれたのだろうか。また「日本人」としてのアイデンティティとは、いったい具体的にどうということなのだ

ろうか。

最後に、佐々木氏は、地域文化の崩壊を食い止めるため、伝説が持つ文化力を子どもたちに伝授すべしとし、四つの場（重心としての行政、学校、家庭、地域町内会）で構成される三角錐と三つの力（報恩の心・継承の心・活性の心）が統合された「文化を育む力」の図式を提示し、この三つの力は、地域創生の必須のエネルギーである、と断言する。地域創生のさまざまな場で、伝説の文化力が大きな役割を果たす、とした著者の提言は重要である。ただ、この図式の重心は、行政ではなく、自主的精神に立つ民衆なのではなかろうか。前述の日持の例が示すように、地域を変革する文化力は諸刃の刃であった「歴史事実」も、地域創生の場で忘れてならないことと考える。「伝説の基本構図Ⅰ」は、歴史と伝説の形式的分類であってはならないはず、常に「事実」への探求と確認が必須となろう。

歴史学と民俗学との距離は、いま逆に拡大している。特に、民俗学の世界での歴史離れは顕著である。このようななか佐々木氏が、伝説を媒体にした歴史学と民俗学の接点を探す、という困難極まる難題に挑戦した事の業績は、絶大である。味読されることを勧める。

（四六判、二二六頁、吉川弘文館、二〇〇七年十月

価格二八〇〇円＋税）

（ほんだ・よしのぶ 岩手県立大学盛岡短期大学教授）